

# 三照庵に祀られている

## 二体の位牌について

野々下 晃

(会員・佐伯市晴干)

古江区(旧古江浦―古郷)の西隅山麓に建てられている庵に、左記の様な二体の位牌が祀られている。

(一)表 源林院殿前防州刺史本誓覺山檀忠大居士神儀  
裏 起立主

正蓮社縁阿託誓上人義問淳至和尚

元文四巳未 祀秋八月廿四日

元文五庚申年

(二)當菴中興開山正蓮社託誓上人縁阿淳至義門大和尚

十二月二十一日

(一)の位牌の戒名には「院殿・大居士」とある。江戸時代には藩主級に贈られた戒名と察せられ、(二)の位牌の戒名には大和尚とあり、本寺の住職級に贈られた戒名と察せられる。



義門和尚位牌



同右裏面



高慶公位牌

亨和五年佐伯藩より幕府に提出した「郷村假名附帳」によれば、古江浦は本郷上浦村の枝郷に属し、長田浦をも字として領し、天保九年の調査に係る旧佐伯藩領在・浦朱仰高及び古田畑毛附高は、沿岸部では浅海井浦と並ぶ大きい集落であった。また、明治維新の大小区制期には十八小区の中樞に位し、用務所が置かれる等、昔より在にあっては古市村、浦においては古江浦が開化的集落ではあった。

なお区に伝わる記録によれば、三照庵は昔より浄土宗の本庵としての古い歴史を誇るとは言っても、庵房に(二)の様な位牌が残されている事情については、訪れた人々がひとしく抱く素朴な疑問であろう。

嘗ってこの庵を訪ねた史談会の大先輩故羽柴弘氏も、「古江三照庵での問題点」と題してこれらの点に触れた次の様な記録を残している。

三照庵は佐伯四国八十四番の札所で、大正十三年一月佐藤鶴谷著になる「佐伯霊場道しるべ」にちゃんと本尊『千手観音菩薩』とあり、また、佛前の一隅に置かれた巡拝者の奉納経に押す木版にも、本尊千手観音、地藏

菩薩と並べてあるのに、須弥壇には地藏菩薩しか祀っていない。千手観音様はどうなったのかという私の問いに、青木氏外古老の人も「知らない」という。これが第一の問題点。

次はその佛壇に殿様の位牌がある。その位牌は黒うるし塗りの大きく堂々たるもので、佐伯藩第六代藩主源林院毛利高慶公を祀ったもの、義問和尚が作ったことになっているが、なぜ六代高慶公の位牌がまつられるに至ったのか、藩公と和尚の個人的なものであるか、またはこの庵が佛餉料でも殿様から頂いたものか、なお位牌の戒名も変で、養賢寺本堂裏にある毛利家墓地の源林公墓碑には、源林院殿故防州刺吏了山惠覚大居士神儀とあり、寛保三癸亥蔵九月十三日が薨去の年月日である。元文四年には源林公はまだ御存命であった。亡くなられたのは、それよりも四年後の寛保三年である。このちがいは何故だろう。

なお、今少し一石一宇塔で「浄土三部経」によるものはじめて見るもの、浄土宗や真宗では普通としているものであるのか、また、義門和尚の位牌には当菴中興開山正蓮社託養上人縁阿淳至義門大和尚となかなかどうし

て立派なもの、一体この中興の義門大和尚という方はどの様な善知識であられたのであろうか、地元古江の方、別府市在住の青木氏から今後教えていただきたいところである。

佐伯藩第六代藩主毛利高慶公と浄土宗潮谷寺との関係について、佐伯藩主毛利家は、藩祖高政公以降禅宗養賢寺がその菩提寺である。故に六代藩主高慶公のご位牌が浄土宗潮谷寺のしかも末庵古江三照庵に祀られている事情について、羽柴氏が深刻な疑問を呈されたのは当然のことと思う。この問いかけに対して平成七年十一月発行された潮谷寺誌は次の様に解説している。

#### ◆浄修堂の由来

佐伯藩主毛利高慶公は騎馬で潮谷寺の門前を通られるたびごとに落馬した。不思議に思つて調べるとありがたい如来様が本尊として祀られていることがわかり、それからは非常に潮谷寺を信仰された。

公の夫人は肥前対馬十万石従四位侍従宗義貞公の娘であつたが、夫人が若くして亡くなると菩提を弔うために

潮谷寺の本堂横にお堂を建て、

夫人の戒名(源智

院殿浄修因<sup>三</sup>)に

なぞらえて浄修

堂と名づけ、夫

人を祀つて年三

十五石を寄進さ

れた。

#### ◆前立阿弥陀如来の由来

高慶公はかような尊い如来様を日頃出しておくのはもつたいないと言われて「龕」に扉を閉ざされ、毎年旧十月のお十夜の間だけ扉を開き、ふだんは新たに佛像を作つて「龕」の前に安置することにした。現在の前立如来がそれである。

新たに佛像を作られる時、公は南無阿弥陀佛の名号を



浄修寺 (潮谷寺境内)

一万遍書かれて佛像の胎内に納められた。

秘佛となった本尊は平安朝時代の佛師定朝の作と伝えられている。

### ◆高慶公のご位牌

元文四年（一七三九）八月高慶公は病床にあつて、黒木実應・長谷川元師・戸倉紀庸つねのりの三家老が寢所に侍つていた。公は「今度の病はとても癒えることはあるまい。このまま死に行くであろう」と死期を予感してか、かねてより帰依きえしていた潮谷寺の隠居託譽義門和尚を呼んで、「我が余命はいくばくもあるまい。ついでには浄土への道案内を乞いたい」と言つて、自らの位牌に戒名を刻ませ上人に託した。義門和尚は潮谷寺の第十一世住持であつた。しかしこの時はすでに古江浦の三照庵に隠棲いんせいしてこの庵を中興開基していたが、公の延命を祈願しながら翌元文五年（一七四〇）に亡くなった。その時の高慶公のご位牌が今もこの庵に祀られている。

和尚の祈願が届いたのか、公の病状は一時回復してそれから四年後の寛保三年（一七四三）九月十三日に亡くなられた。この時の戒名は菩提寺養賢寺に改められ、源

林院殿故防州刺吏了山惠覚大居士神儀となった。公の願い通り潮谷寺の浄修堂には、夫人の戒名と共に並んで刻まれた位牌が祀られている。

因みにこの寺誌（潮谷寺物語）は佐藤巧氏の編集作画に成るものであるが、氏はその跋ちがきに次の様に述べている。

この「物語」は昭和二十八年に発行された増村隆也著「佐伯郷土史」、ならびに昭和三十一年同寺の再建落慶式典の際同氏が寄贈された「潮谷寺略記」、およびその資料をもとに昭和四十九年佐伯市発行の「佐伯市史」、さらに佐伯史談会員による最近の研究成果を加えて編集したと。

次にこの機に高慶公についてその経歴・業績等を再録すると、公は豊後森藩（一万二千五百石）久留島道清の五男に生れ、初めの名を高定と言ひ正徳年中に高寛と改めたが、享保十四年（一七二九）三月高慶と改名した。元禄元年（一六八八）七月兄高久公の嗣子となり、同十二年（一六九九）毛利家第六代藩主を継いで、同十四年（一七〇一）五月二十七歳の時はじめて佐伯領に入国した。

これまで佐伯藩主は幼少または病弱の人が多く、殆んど江戸の藩邸に住み帰ることはなかったが、公は先ずお國入りの儀を復活し入城、大書院で群臣を謁見して藩主としての權威を示し、この年九月十五條の改治條目を發布し次いで十月二十八日初めて領内を巡視した。

このことは藩祖高政公以来はじめて行われた行事で、歴代の藩主は病弱か若死のために一度も領内を巡視したことはなかった。また、同年十一月三の丸の樓門に大鼓をかけて時刻を告げることとし、同年十二月養賢寺前に關所を設け、翌十五年六月戸倉庸重の死後嗣子が無いのを憂い、益田令治をしてその後を継がせた他、同年十月江戸から明石五郎大夫を招いて、学問を掌らしめ、宝永二年（一七〇五）木炭製造所を造り其の生産を高め、この年十二月の内町大火には金や物・竹材・茅等を罹災者に施与する等、藩主襲封後五ヶ年の間に政治・経済・産業開發や領民の救済に力を注ぐと共に藩士の動靜を觀察していたが、五年を経てのちはじめて家老沼兵大夫の専横を責め、領外に追放した。

佐伯藩は三代高尚公より五代高久公が隱居するまで家老沼父子が政治の實権を握っていたが、職務を怠って専

横のため風俗、諸政は廢れていた。

高慶公は意を決してこれを旧に復そうとつとめ、兵大夫を追放し家老戸倉庸重を用いて弊政を改めさせ、明石五郎大夫に文学を、また、滿江政右衛門に兵学を掌らしめて子弟の教育に当らせ、橋佐古主計を挙げて神道を興し、僧乾堂を養賢寺の住持に拔擢して佛教を広め、小林九左衛門を登用して經濟財政を改革せしめた。

高慶公の治世は、元禄十二年（一六九九）より寛保二年（一七四二）病気で隱居するまで四十三年の長期に亘ったが、その間に諸政は全く一新し、毛利藩を中興した天資英邁の英主として称えられた藩主であった。

（一の位牌の主）

次にかかる英邁な藩主高慶公に深く帰依された義門和尚（二の位牌の主）とはどの様な僧であつたのであろうか。

昭和五十二年（一九七七）十二月、三照庵の再建落慶を記念して境内に建てられた碑石には、その紋を左記の様まじに刻んでいる。

碑文「古江三照庵貞亨年中（一六八〇）開山一字創建

元文二年（一七三六）当庵中興英主義門託誉大和尚芝増上寺学寮辞去故里帰本堂宇拡張整備云々」と。

因みにこの碑文は当時の区民代表が草案したことになっているが、文意を詳細に検討を重ねると違和感を感じる句が散見される。

その一は「元文二年芝増上寺の学寮を辞去」とあるくだけである。

潮谷寺は不幸にして昭和十八年の大火によって、全焼し、本尊と過去帳を除く多くの重宝を焼失した。したがって、義門和尚の出自、経歴等に関する記録等全く残っていないが、唯この和尚の存在を立証する対象としては墓



託誉義門和尚墓（潮谷寺墓地）

碑のみである。

寺の山門を入ると幼稚園舎に隣接して歴代住持の墓地がある。墓碑は三列に並立しているが、その前列向かって右端に十六世真誉上人と並んで葬られているのが十一世託誉義門和尚である。

この墓碑がこの寺に存在することによって、三照庵を中興開山した義門和尚とは、嶺雲山潮谷寺十一世住持正蓮社託誉上人縁阿淳至義門大和尚が、隠棲してこの庵の庵主となったと断定出来るのである。したがって、碑文中この和尚が増上寺の学僧であったという記述は誤りで、その取材源が正しい史実を伝えていなかったのではなか。か。

その二は碑文中義門和尚の故里が古江浦であるかの如く解せられる字句があるが、前にも述べた通り義門に関する記録はすでに焼失し不明である。

なお、潮谷寺には高慶公縁（ゆかり）の史料として左記の対象廟堂が残っている。参考までに挙げておく。

#### 記

- 一、弁財天廟 宝永五年（一七〇八）
- 一、浄修堂 正徳五年（一七一五）前年亡くなった夫

人の霊を弔う。

一、小林九左衛門の墓碑 享保七年（一七二二）

山門から浄修堂の参道に沿って

一、前立如来寄進 享保十四年十二月（一七二九）

一、寺伝によると浄修堂参道に沿って、小林九左衛門の墓の隣に建っている側室奥井志幾子の墓（戒名

智覚院殿量誉慈仙壽心大姉）

享保十五年七月十七日（一七三〇）

一、地藏堂 元文四年十二月（一七四〇）山門入口

### 編集者附記

本文の中で三照庵の須弥壇には地藏菩薩しか祀られていないのに、なぜ「佐伯霊場道しるべ」には本尊が千手観音菩薩となっているのかということであるが、これを説明すると「霊場道しるべ」に記載された札所は、すべて本四国の札所と同一本尊としているためである。

三照庵の場合本四国の八十四番は源平合戦で知られる屋島寺である。この寺の本尊は十一面観世音菩薩（四国八十八ヶ所詳細地図帖より）で図はそのお姿であるが、

千手観世音菩薩と間違えやすい。これは私が四国巡礼の際受けて来たもので、二・三ヶ寺を除きすべて保管している。

では何故そうしたのか理由は分からないが、本四国にあやかっただけのことであろう。したがって、少数の庵・寺を除き本尊が本四国と一致する札所はない。

